

## 地域通貨とコミュニティ (4)

別府大学地域社会研究センター  
前所長 秋田 清

### 1 座談会続き

久しぶりに学生たちが集まった。今回は卒業生たちが多い。

E男：先生退職されたそうですね。別府に帰って来て、聞いてびっくりしました。それであわてて駆けつけたのですが、意外に言って失礼ですけど、相変わらずお元気そうですね。

X先生：そう、相変わらず、馬鹿やっています。

E男：今日は遠慮しようかと思ってきたのですが、それなら、早速ですが、これまで後回しにされてきた、共通感覚とか、思考習慣、常識などについてお聞きしたいのですが、今年は、「雰囲気や空気」を卒論のテーマにした人がいたそうですね。

X先生：そうなんですよ。なんとも厄介な問題ですね。

D子：その卒論だれが書いてるの？

L子：すみません、私です。

D子：謝ることはないと思うけど。でも、どうして「雰囲気」などとりあげたん？

L子：なにか周りの人になじめないことがよくあるのです。一人でいるとさびしいので、親しくしてきた人たちが集まっているところに近づいていくのですが、話に加わりたいたって、テレビの番組やタレントの話、ファッションの話など、昨日も同じこと話していたじゃないとか、そんなことどうでもいいじゃないとか、何が面白いんだろうとか思ってしまうのです。でも、その場を離れたらやっぱりさびしい。それで自分はなぜその場になじめないのんだろうとか、雰囲気を作っているものって何だろうとか思ったので...

D子：それは大変ね。Lさんは先生のゼミには珍しく生真面目な人なんだね。

E男：「珍しく」はないだろう。いい加減なのはお前だけや。

D子：そう、「良い加減」なのは私たちだけ。Eちゃんも根は真面目やからね。

E男：それで、僕は全く知らないけど、雰囲気とか空気とかについてこれまで論じた人誰かいるの？

L子：はい、テレンバッハの『味と雰囲気』という本があります。それにメルロ・ポンティもそれらしきことをいろいろ言っています。それに先輩たちも読んでいらっしゃる中村雄二郎の『共通感覚論』や、木村敏さんや野家啓一さんも参考になりました。

X先生：それに、みんなあまり重視しなかったかもしれないけど、マルクスが『経済学・哲学草稿』で、アリストテレスの「共通感覚」論に刺激されて面白いことを言ってる。中村さんもこれに触れているけど、人間の感覚が全歴史の産物だということの確認だけに終わっている。

E男：えっ、どういうことですか？

X先生：マルクスは、科学の発展や産業の歴史、自然史や人間の歴史、人間の自然史について、つまりは人間の生活の総体との関係で感覚論を展開している。そうしたものの関係で感覚論は展開しないと、共通感覚と常識の間が埋められない。

共通感覚も常識も、英語で言うと common sense だけど、日本語では訳し分ける。個の内部における五感の統合という意味での共通感覚とそれが他者との間での共通という意味での共通感覚、それに感覚というより常識。常識というのは思考習慣や規範、それが織りなされて制度が形成

される。それに「良識」という言葉もある。

D子：また先生先走りする。最初のLさんの問題は置いてきぼりじゃない。

X先生：ごめん、ごめん。それで...？

D子：なんとなく、周りになじめないことって、私も良くわかる気がする。

E男：Dさんは、変わり者だからいつもなじめないんじゃない？

D子：だからあまり周りの人たちのことは気にしないで生きている。気にしたら、何が何だかわからなくなる。毎日毎日の行動、一つ一つのことを何の意味があるんだろうって考えると、何の意味もないんじゃないかと思えてきて虚しくなる。だから面倒なこと考えないで、毎日犬と戯れて楽しくやってる。だって、疑ったら、世界なんて一瞬で崩壊しますよ。

L子：そうなんです。周りの人の話に違和感を感じて、なんでなじめないんだろう、なじめない自分は変なのか、自分って何だろう、何のために生きているんだろうと考えていくと、自分自身が空しくなって、何も残らなくなる。生きてることに何の意味も感じられなくなるんです。先生に相談すると、そんなものないよって言われる。

B子：生きる意味なんかないって？ 相変わらず、むちゃくちゃな対応だね。

J子：いや、そんなものやっぱらないんじゃないですか。単に生まれたという事実だけがある。それを「愛の結晶」などというから、何か崇高なもののように思われる。崇高なものや美しいものでないといけないみたいな強迫観念にとりつかれたりする。「崇高なもの」っていうのは、そう捉えるかどうかの問題だと思うんですけど。

X先生：そう、親にとっては「愛の結晶」かもしれないし、そのように育てられれば、そのようなものとして育っていく。本人にとっては、さしあたり事実として産み落とされただけですよね。だから、自分の周りのものみんな疑ってしまえば、当然自分もなくなっちゃうでしょう。生きる意味なんて、そこらに転がっているものではなくて、自分で創っていくもの、あるいは出来ていくものでしょう。

L子：そう言われると確かにそうなんですけど。

でも、ある時ふっとすべての意味が消えうせていくのです。すべてが虚しく思えてくるのです。

X先生：統合失調症もそうだけど、鬱って、脳の癖みたいなものでしょう。何か些細なきっかけでもスイッチがカチッと入ったら、切れたらかな、そこは真っ暗闇。

L子：脳の癖と言われると、よくわかる気がします。理由なんかなくとも、何かのはずみで突然そうなっちゃうんです。

X先生：自分の進もうとしていた道が断たれたり、人との関係が断たれたり、自分の思うように築けなかったりというのは誰でもしばしば経験することだけど、そのとき新しい道や関係を作ればいいやと思えないで、壊れたものにこだわり続けていると、後悔の念だけが肥大化し、眠れなくなって、体力も消耗するし、思考も働かなくなる。自分の周りにあるものを、自分を中心に統合できなくなる。自分の全てが失われていく。前に進めないからひたすら取り返しのつかない過去にこだわり続ける。そうして、意志を欠いて世界に対峙するのだから、無力感や空虚感だけが自分を支配する。それで、死を選ばなければ、逆に直接的に生きてる感覚あるいは他者との関係を取り戻そうとして、リストカットに走ったり、セックス依存症に陥ったりする。

J子：リストカットはよくわかりませんが、セックス依存症はわかる気がします。生きてる実感がなくなってしまったとき、自分が他者とつながっていることを確認しないではいられなくなる。それを肌と肌との直接的触れ合いに求めるんじゃないですか。

X先生：リストカットも痛さによって生きてることを確認したり、私のことを心配してよと訴えるという意味では似たようなものかな。リストカットをした人が「ただ黙って抱きしめてくれたことが救いになった」という話をしてましたよね。

J子：生きてる意味が消えてしまうだけではなく、生きていてもいいのか、自分が生きていることが許されるのか、と思っちゃうんですよね。そういう意味では、ただ抱きしめるだけというのは意味があるような気がします。

H子：私は、卒論で「愛着」について書いたので



すけど、動物実験などで、明らかにされているように、肌と肌の触れ合いって、とても大事なもののような気がします。感覚でいえば、中村さんも言っているように、触覚とか嗅覚というのは人間も含めて生き物にとってとても大事な気がします。子供が母親に抱っこされるのも、恋人同士が抱き合うのも、親子の愛情と男女の性愛とは一応区別しますが、根っこは同じじゃないかとさえ思えてきます。男性が母親に求めて満たされなかったものを恋人に求めるとか。気づくと嫌になるから違うものなのでしょうけど(笑)。

J子：先生はさっき鬱の人が「過去にこだわり続ける」とおっしゃったけど、それは自分の過去が、今の自分にとってどんな意味があるか整理できないことにあるような気がします。先生は時々、今の自分はほかにあり様がなかったのだ、必然的なものなのだ。過去の自分は悲惨かもしれないけど、それは今の自分を生み出すために必要だったんだ。今のままの自分に自信を持ちなさいって言われるけど、そうできないで苦しんでいるのに、そんなこと言われてもという気になります。「過ぎ去りしものは／過ぎ去りしものなれば／過ぎ去りしものとして／そのままにせん」とか、ホメロスかなんか知らんけど。そのままにできるためには、現在の自分を軸に、過去を統合できた時だと思うんです。そういう意味で、メルロ・ポンティ

も似たようなこと言ってたけど、セラピストや精神科医がやらなければならないことは、クライアントの過去を未来に向けて再構成するというか、物語を一緒に作り上げることだと思うんです。過去の事実は変わらないけど、解釈は自由だし、それは普通に誰でもやっていることだと思います。鬱状態になったとき、それが自分ではできなくなっている。それをちょっと援助してやる。それが必要な気がします。

E男：そう言われると、案外、単純なことのようないきがしてくるね。でも、元に戻って、もう少し「雰囲気」の話聞こうか。

## 2 雰囲気

L子：テレンバッハは、「雰囲気」を「人間の人格を特徴づけるような一つの本質発散」だといいます。それは、声による聴覚刺激でも容姿による視覚刺激でもなく、それらの個別諸感覚を超えてある「より以上のもの」です。

J子：テレンバッハが問題にしているのは、場の雰囲気ではなく、個人が醸し出す雰囲気を問題にしているの？ 言葉ではなく声の性質、表情、仕草などに表れる、そのもとになっているもの。

L子：はい、ただ、場の雰囲気と個人が持っているものとははっきり区別して論じているわけではありません。たとえば、「雰囲気的なものへの勘はわれわれにとって、共同世界と環境世界を全く直接的そして統一的に特徴づけるものをとらえる一つの器官である」とも云っています。場の雰囲気といえるものを固有に論じてはいるわけではなくて、軸足は個人が持っている雰囲気にあるといえます。ここでは、また、雰囲気をとらえる器官があると云っているのですが、これは、さっきから問題になっている共通感覚みたいなものかとも思います。

E男：それで、その雰囲気や雰囲気を感じるもの

1) 精神分析的治療が患者を癒すのは、過去の意識化を惹き起すことによってではなく、何よりもまず患者を、実存の新たな関係によってその医師に結びつけるからだ。患者にとって問題なのは、精神分析的解釈に学問的な同意を示して過去の概念的意味を発見することなどではなく、あれやこれやを意味するものとしての過去を生きなおすことであり、患者がそれに成功するには、彼と医師との共存の視角から己の過去を見るしかないのである(メルロ・ポンティ、1945、『知覚の現象学』竹内芳郎／小木貞孝訳、みすず書房、1967年、p. 373)。

の根拠というか発生源は何なのですか。

L子：「その起源は私の対他性の根底に、またその目標は私自身の直接性の深みにある」とテレンバッハは云います。つまり、その起源を探っていくと、私自身の直接性にたどりつくというのです。「他人の雰囲気を感じとるなかで私が経験するのは、自然と生活史の持つ形成力が彼をその中に気分づけるところの、彼の直接性である。この発散は私の気分性の起源に直接到達する」というのですが、その形成は、生れ落ちてからの母親や家庭、あるいは他者との関係の中で形成される、ということのようです。

J子：おばあちゃんが、「お里が知れる」とかよく言ってたけど、そんなものかな。育ちが問題（笑）。それはたしかに、とくに乳幼児期に形成されるものかもしれないね。

L子：テレンバッハは、雰囲気こそが他者との関係のなかで自己を確認する根底的なものだと考えているようです。

直接の、志向的にはわれわれに向けられない、対他性の放射だけが、どう我々は自分自身を理解するかを、教えるのではない。われわれの放射に対して他者が返す志向的に我々に向けられた雰囲気的な共鳴を感じ取ることで、我々は、ある特定の帰属性への我々の要求が認められるか、それとも拒まれるかを知る。このきわめて精妙な働きを思い浮かべることによって、いかにわれわれはわれわれ自身を絶えず他者から取り戻しているかが明かされる（テレンバッハ、p.62）。

J子：共鳴ですか。言葉を変えると、他者は自己の鏡という話ですかね。

L子：はい、それで、続けてテレンバッハは「この自己は、弱ければ弱いほど、ますますこうした逆参照 — いわば〈逆保証（Rückversicherung）〉としての — に頼ることになる」と云っているのですが、なるほどそういうものかという気になりました。ちょっと飛躍しますけど、仲間に入れてもらおうとか、なじもうとするからなじめない。

自分はその場の雰囲気づくりに参加していないわけですから。

J子：でも、参加して雰囲気変えるって難しいよね。

D子：だから、そんな人たち相手にせんけりゃいいのよ。

B子：またあ、此処でそんなこと言ったらどうどうめぐりやろ。

### 3 素人と専門家

D子：話聞いていると、鬱だの雰囲気だの、先生大変そうやね、最近そんなに相談に来る学生多いの。そんなの臨床心理士がたくさんいるんだから彼らに任せとけばいいのに。

X先生：いや、私のところに直接来る学生は多くはない。Z先生のところは相変わらず多いよね。

D子：でも、Z先生も臨床心理士ではないよね。学生のころ友達が、「心理学の先生たちは、人の心理はわかるかもしれないけど、人の心はわからん」とか言ってたけど。

X先生：それは言い過ぎだろうけど、でも、彼らが「心の専門家」などと言って気取っているうちは、普通の人の心はわからないよね。専門家ができるのはせいぜい解説でしょう。相談者が「治る」とすれば、さっきJさんも言ってたけど、それは相談を受けた人が相談者と同じ普通の人（素人）として、共に生きていくことによってだけでしょう。治すのではなく、勝手に治るのですよ。

E男：そういえば、木村さんも「医者が診ていて患者が治った時に、三つの可能性がある」と。治療したから治った。治療している間に治った。治療したにもかかわらず治った。その三つの可能性をいつも考えておけということを先輩から教わった<sup>2)</sup>とおっしゃってますね。要するに自然治癒力だと。「治療したから治った」というのはめったになくて、たいていは「治療している間に治った」か「治療したにもかかわらず治った」のだと。

D子：それはプロの医者 of 自戒の念としてでしょう。先生みたいなズブの素人がそんなこと言っ

<sup>2)</sup> 対談・岡田節人×木村敏「身体の中の進化論」（『構造としての身体』河出書房新社、1997）p.19。

ちゃあいかんよ。

X先生：はい、すみません。でも、素人の感覚は大事なんですよ。それに、JさんやD君が言ったことは治療にも教育にも同じように当てはまることのような気がする。

J子：相談に来る人は素人なんですよね。「心の専門家」が「心の素人」の相談を受けるって、当たり前のようにも思えますけど、なんか違うような気がします。相談に来る人は、その人に固有の生活があつて、悩んだり苦しんだりしてきていますよね。それを一般的な傾向がわかる専門家に相談するわけですね。一般的な傾向を解明するというのは確かに必要で、科学的かもしれないですけど、学問的ではないような気がするんです。

科学的に一般的な傾向を出してみるのが無意味だという気はないのですが、人間の一面を見るにすぎない。具体的に生きてる人間はどこに行つたのかなという気になります。

E男：私は実験や心理査定なんかまじめにやらなかったから、大きなことは言えないんだけど、人間の一面だけを取り出して、数値化して、統計処理をして、客観的と言われても、血液型性格判断と大同小異ではないかと思えてくる。占いや預言、前世療法のほうがよほど効果的じゃないかという気がします。

X先生：まあ、「占いと予言は必ず当たる」という言葉もありますからね。

B子：はい、はい。なんか、いつものとおり変なことになったけど、「地域通貨とコミュニティ」とかで続いている座談会だよ。本筋に戻してよ。

X先生：本筋から離れているとは思わんけど、まあいいや。いや、よくないか。

B子：どっちなん！

X先生：いや、臨床心理学の人たちの多くは、心は個人のものだと思って、その「理」を解明しようとするし、治そうとする。個人のもの、特殊なものと言いながら、それを繋ぐ術もないまま、一般化しようとする。そうすると、結局のところ「気持ちの持ちよう」ということになって、うまく現実にあわせることだけが問題になる。悩みや苦しきは社会的なもの、もっと一般化すると、い

わゆる自然も含めて外界との関係の中で起きるものですよ。外界をそのままにして個人だけを変えるというのは不可能です。それはそれこそ時代の雰囲気や権力、暴力によって押さえつけてるだけです。問題は何も解決していない。気の持ちようが大事だということは認めますけどね。それは他者との関係があるから大事なんです。

それに、心理学と実際のカウンセリングとは、切れてますよね。実験や査定などで人間や人間の悩みがわかるわけがない。人間は常に総体として存在しています。情動や感情、あるいは個人が持つてる雰囲気と心理学的知識は、別のもので。あるいは別のものにすることによって科学は成立している。だから実際のカウンセリングは、井戸端会議でおばちゃんたちがやってたり、友達同士で悩みを打ち明けあったり、場合によっては犬の調教と変わらない。それを、クライアントは一人ひとり違うから同じ対応をしてもだめだとか、どんな理論に依ろうとも結局はカウンセラーの《腕》だとか言い出す。臨床心理学を学問として成立させたければ、たぶんこの《腕》を解明することだと思うのだけど、彼らはそれをやろうともしない。

E男：腕の力で抑えつけてたりして（笑）。解明できれば、腕のいい人が育つかどうか疑わしいので、どうでもよいような気もしますが、先生の話聞いていて思い出したのですが、以前、テレビ番組で、血液型性格判断の実験をしていました。園児を血液型ごとのグループに分けて、自由に遊ばせるというものです。名前は忘れましたが、実験を指導した心理学者が、自分たちが通常やっている実験より大きな有意差が出ている。それでも私は信じないけど、と言っていました。なんで、あんなに心理学の人は血液型性格判断を毛嫌いのですかね。

X先生：近親憎悪でしょう。自分たちがやってることを鏡にうつされたような気になる。そのメカニズムも因果関係も明らかになっているわけではない。その意味では科学的とさえ言い難い。その限り、心理学の実験も血液型性格判断も同じだよ。研究の出発点から半歩も出ていない。

B子：またあ、脱線する。ダメよ。先生が心理学

嫌いなのはわかってるから。

X先生：嫌いじゃないよ。心理学や精神分析は高校生のころから関心があって、それを勉強したいと思って大学に来たのだから。でも、講義に出てばかばかしくなると、哲学史に行った。それから経済学部。最近、先祖帰りで、心理学や精神分析の哲学的基礎。好きだから、多少はまともになりたいと思っているだけだよ。

それでね、昔、『瓢鰻亭通信』の前田俊彦さんは、叙述と陳述は違っておっしゃっていたけど、近代科学 — 近代を付けるのは、英語の science もドイツ語の Wissenschaft と同様に、もともと「知の総体」を意味したのに、特に英語の science は、近代になって「科の学」になってしまったからだけど — は、個人から離れた客観的なものが真理だというイデオロギー（虚偽意識）を生み出した。そうすると、人の感情とか情動などの曖昧なものは統計学的手法で数値化してとらえる以外になくなった。それを、古くはヘーゲルやマルクス、20世紀になってからは現象学の流れに位置する人々が批判した。貨幣と近代科学が神にとって代わった時代の精神をニーチェは「神は死んだ」と断定したともいえる。

だから前田さん流に言うと、ヘーゲルやマルクスなどの目的論的思考、特にマルクスの場合は、同時に陳述でもある叙述を行おうとしたといえる。

それで、さっきE君も言ったように、これまで後回しにしてきた「共通感覚」や「常識」について今回は問題にしようということなんです。まあ、多少脱線するのは大目に見てよ。

B子：わかった、わかった。で、要するに「個人と社会」（「個人と歴史」かな？）を問題にしようということなんやね。

X先生：そういうことです。つまり、「地域」とか「コミュニティ」とかを問題にすると、制度、規範、思考習慣などのように、みんなが理解するのに苦労した「関係の第一次性」、「間主観・共同主観」あるいは「間」を具体的にどう捉えるかということが問題になる。貨幣も商品交換関係の体化したものだよ。マルクスが端的に言うように「人間とは社会的諸関係の総体である」と言って



もいいし、ハイデガーのように「世界・内・存在」と言ってもいい。でもね、マルクスも、エンゲルスでさえも言っているように、「歴史を作るのは人間自身」だし、「意識的な意図、意欲された目標なしにはなにごともしこらない」わけで、「人間＝社会（あるいは＝歴史）」といっても、ここで言われている意図や意欲を社会そのもの（社会総体）の意図や意欲だと主張することは確かにできる。それでもなお、それが身体を持った個人に体化され、担われない限り歴史は動かないよね。今の状態を嫌だというのは社会じゃなくて個人だよ。社会の「危機」というのは社会が「嫌だ」と言っているとも言えるけど、個人の悩みや苦しみの中にこそ現状を変える動因があるし、そこに社会の再編の可能性があると思うんだけどね。

B子：相変わらず、おじいちゃん若いね。結構けっこう。じゃあ、共通感覚論とかを聞こうか。

### 3 共通感覚と常識の間

X先生：では、では、Lさん、言葉の確認から始めようか。

L子：先輩たちもご存じだと思いますが、おさらいの意味で整理します。人間の感覚は一般的には、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五つに分けることができるといいます。そして、それぞれの感官から伝達された情報をとらえる脳の部位があります。脳科学の発展のある段階でこうした部位が明らかになるとそれぞれの感覚が独立して働いているかのような認識が生まれます。要素に分解して対象を明らかにするという近代科学の成果と

弊害がここにあるともいえます。

ところが実際には、比較的最近ですが共感覚者の存在が実験的にも確認されるようになりました。たとえば、文字や数字をみるとそれぞれの文字や数字に色が付いて見える。言葉を聞くと口の中に味が広がる。たとえば「デレク」という名前を聞くと「耳垢」の味がするとか。これは確かに変ですが、二つ以上の感覚が同時に働くというのは、ちょっと考えてみるとそれほど不思議なことではないことがわかります。離れて観て、触ってもいないのに、鉄や石は堅いと感じるし、布や綿は柔らかく感じます。「黄色い声」などということ私たちは普通にいいます。わざとらしい言動を臭いがするわけでもないのに「クサイ」と言います。そう考えてみると、私たちの五感は独立して働いているわけではなくて、それらを統合して対象を認識していることがわかります。これら五感を統合する感覚を「共通感覚」と言います。直接的には個人の五感の統合されたものを共通感覚と言いますが、「共通」なものが形成されるときに、他の人ともかなりの程度共通なものが形成されるという点を先生は強調されます。私が問題にした「雰囲気」や「空気」というのもそこで形成され認識されるとさしあたり云えます。

**X先生**：大まかにはそういうことなのですが、問題をはっきりさせるために、中村さんが『共通感覚論』<sup>31</sup>の中で引用している木村さんの発言を見ておくことにしましょう。

人間の生命機能を要素心理学のように解体せず、むしろ世界に対する人間の全体的な関与の働きとしてとらえる考え方…(中略)…によるならば、感覚も感情も意思も知性も、すべてこの全体的な関与の部分的な側面としてそれぞれ意味を帯びてくるのである。そしてこの場合、それらすべての人間の活動の根底に、一つの感受能力を認めなければならないだろう。それは、〈現実との生命接触〉(ミンコフスキー)とか、〈世界との共感的全体関係〉(E・シュトラウス)とか呼ばれうるような、人間と世界との根源的な通路付けをもたらすような一種の感受

能力である(中村、p.46)。

ここでは、「感覚も感情も意思も知性も、すべてこの全体的な関与の部分的な側面としてそれぞれ意味を帯びてくる」と言われているわけですね。われわれは、そうしたものを区別しているけど、実際には同時に働いているということなんです。論理的には整合性のある理論にも、なんかおかしい、腑に落ちないという感覚をわれわれは持つことがあるよね。

**B子**：逆に、好きな人の発言だったら、論理的整合性なんかなくても、納得したり。

**D子**：それはちょっと話の流れが違うんじゃない。

**X先生**：たしかに、好きな人の発言だったら、ちょっとおかしいと思ってもおかしくない論理的なつながりを考えたりするけどね。今問題にしているのは、知性などという一見感覚や感情などと異なったものだと考えがちなものも、意外に感覚とか感情との関係をもっていて、そうしたものを総合して判断しているという話です。そして大事なものは、根源的な「感受能力」というものがあるということです。中村さんは木村さんから引用して次のようにも云ってます。

アリストテレスが—と木村はつづけて言う—〈共通感覚〉と名付けたこの基本的な感受性は、人間と世界を根源的に通路付け、我々人間にとって、そもそも〈世界〉といわれるものを現前させる働きを持っている。そしてこの感受性が欠けるとき、〈世界〉は単なる〈感覚刺激の束〉としてただ我々の感覚表面に突き刺さってくるカオスに過ぎなくなる。われわれの方からそれを積極的に〈世界〉として構成することがどうしてもできなくなる。すでにアリストテレスは〈共通感覚〉を〈構想の能力〉とみなしたが、この〈構想〉とは単なる創造や空想の意味を超えて、現勢的な構成的知覚に際していつでも一緒に働いているものなのだ(ibid. pp. 47-8)。

**J子**：そのことと関連して、『あなたのなかのサ

<sup>31</sup> 中村雄二郎(1979)『共通感覚論』岩波現代文庫、2000年。

ル』という本で面白い話を見つけました。

道徳的なジレンマを解決しなければならないときの、人間の脳の活動をスキャナーで調べると、脳の奥深くにあって原始的な情動をつかさどる領域が活発になっていることがわかった。道徳的な判断は、人間が発達させた表面の新皮質ではなく、何百万年も前のもっと古い進化に根ざしている（ヴァール、pp. 46-7）<sup>4)</sup>。

道徳的な判断というと、それは前頭葉でだけ考えていると思いきや、そうではなく、「原始的な情動」だというのは面白いと思うのですけど。

D子：面白いね。でもちょっと考えてみると、当り前かという気にもなるけどね。

E男：なんか救われますね。いや、よくわからないけど、ふつう考えているものよりも、もう少し確かなものがあるというか。もちろん、「原始的な情動」とか、「何百万年も前の」と言っても、所詮、人間の進化の過程で生まれたものでしかないと言えそうだけど。

X先生：いや、もっと古く人間の祖先がネズミみたいな哺乳類でしかなかった頃のものかもしれないし、最初の生命から引き継いだものかもしれないけどね。

J子：先生、また、物質には意思があるとか変なこと言い出したらいかんよ。

X先生：いや、ユングの「原型」論なんか思いだしていたんだけどね。

B子：そんなクラクラ換えんの。共通感覚の話をしてたんやろ。

X先生：はい、そうでした。それでね、木村さんが言うように、根源的な感受能力みたいなものが理論的な知性も含めて統合している、とさしあたり言える。問題はそれがどのように他者との間で共通のものを持っているかということなんですけどね。

L子：私の書きかけの卒論を皆さんと議論していただいているようで、申し訳ないのですけど、野

家さんは「規則」に関して、「〈同一の規則〉がまずあって、それが教え込まれたり、反復されたりするわけではない。むしろ〈規則の同一性〉は、反復という〈実践〉によって初めて確立される」。「最初に行われる〈反復〉とは、クリプキの言葉を借りるならば、『暗黙の中における跳躍』にも似た一つの投機的実践なのである」とおっしゃっています。そして、「最初の反復」について、ダマシオは「快と不快」の情動を根拠にして説明します<sup>5)</sup>。要するに、問題を生じないような機能を果たした故に規則的なものになったということです。

E男：やっぱり、「快・不快原理」ですか。そこは、さっきJさんがちょっと茶化して言った「物質には意思がある」あるいは「意思とは何か、感情とか情動とは何か」ということを、いわば自然科学的に明らかにしない限り、それ以上踏み込めないのしょうね。

J子：いやあー、それは明らかにならなんでしょう（笑）。玉葱ですよ。芯はあるようでない、無いようである。

X先生：玉葱か。普通はラッキョウって云うけどね。

B子：玉葱でも、ラッキョウでもいいけど、先生のとこ変な学生ばかり集まるね。はい、はい、分かっています。私が一番変です。

X先生：Lさん続けて。

L子：それで、脳の機能についても調べてみたのですが、脳科学者のエーデルマンは「神経グループニズム」あるいは「神経細胞群選択仮説 (Theory of Neuronal Group Selection: TNGS)」という理論を提唱しているのですが、この理論で重要なのは、「再入力」、「同期 (同時発火)」、「縮退」という概念です。

再入力とは、いくつもの脳領域を結びつける並行的、同時進行的な信号伝達であり、行ったり来たり繰り返される信号のやり取りである。そしてこのやり取りによって、別々の脳領域の活動が時間的

<sup>4)</sup> フランス・ドゥ・ヴァール『あなたのなかのサル-霊長類学者が明かす「人間らしさ」の起源』早川書房、2005年 (Frans De Waal, *OUR INNER APE*, 2005)。

<sup>5)</sup> アントニオ・R・ダマシオ『無意識の脳 自己意識の脳-身体と情動と感情の神秘』田中三彦訳、講談社、2003年。



および空間的に協調するわけだ。…(中略)…こういった動的なプロセスが遂行される結果、脳のいろいろな場所で起きているニューロン活動が広範囲にわたって同期する。これによって異なったニューロン群がひとつにまとまり、全体として意味をなす出力が可能になる(エーデルマン, p.58)<sup>6)</sup>。

それで、優位に使われる回路、あるいはニューロン群のシナプス結合は強度を増していきます。で、「縮退」というのは、「ある系において、構造の異なる複数の要素が、同じ働きをする、あるいは同じ出力を生み出す能力」ということなのですが、これによって私たちは、変化していく現実、出会うたびに新たに、そして即座に判断を迫られる現実に対応していく柔軟性を身につけてきたといえるわけです。共通感覚を形成する脳の機能は、このようなものと考えられます。

別の見方をすると、生まれたばかりの脳のニューロンはさまざまなシナプス突起をもっているけど、それが環境とのかかわりで、ある突起は伸び、他のニューロンと結びつきネットワークを作る。他の突起はいつのまにか消滅する。こうして、特定の人間に固有のネットワークの形が出来上がり、その人の性格や人格を形成するというこのようです。

B子：どういうこと？ よくわからん。

X先生：たとえばね、Bさんが外に立ってる一本の樹を見てる。Bさんは、見てる瞬間々に、木の名前を考えたり、風が吹いてるなど感じたり、以前木の陰で恋人と話をした時のこと、失恋した時のことでもいいけど、を思い出したり、同じ木を見ていてもさまざまなこととの関係でみている。その瞬間々にニューロンのネットワークは組み替えられ、同期し、同じ樹(異なった樹かな)を見ていくというようなことです。同期するネットワークは強化され、人の感じ方や思考の癖を形づくる。

E男：それは遺伝するのでしょうか？

X先生：さあ、どうでしょうか。世代が変わるご

とに微小であってもDNAの書き換えに影響するんじゃないかな。1世代だけでは表面的には分かりにくいけど、脳も他の身体も変化していきますよね。

D子：脳や遺伝の話は個人というか生物としての個体の話だよ。遺伝は世代間のものだけど。その個体としての変化が社会的にというか、自然も含めて外的世界とのかかわりでどのように形成されていくか、関係にあるかというのが、問題だよ。それはどうなん？ さっきマルクスがどうとかいってたけど。

X先生：社会と個人について直接語っているところから始めようか。『経済学・哲学草稿』でマルクスは次のように云っています。

「社会」を再び抽象物として個人と対立させて固定することは、なによりもまず避けるべきである。個人は社会的存在である。だから彼の生命の発現は — たとえそれが共同体的な、すなわち他人とともに同時に遂行された生命発現という直接的形態で現れないとしても — 社会的生命の発現であり、確認なのである。たとえ個人的生活の現存様式が、類的生活のたぶんに特殊な様式であったりたぶんに普遍的な様式であったりする — そしてこのことは必然的なことなのであるが — としても、あるいはさらに類的生活がたぶんに特殊な、またはたぶんに普遍的な個人的な生活であるとしても、人間の個人的生活と類的生活とは、別個のものではない(『経・哲草稿』, pp.134-35)。

したがって人間は、たとえ彼がどれほど特殊な個人であるにせよ、— そしてまさに彼の特殊性が彼を個人とし、そして現実的な個体的共同存在とするとしても — 同じ程度にまた彼は思惟され感受された社会そのものの総体性、観念的総体性、主観的な現存であり、同様に現実においても、彼は社会的現存の直感や現実的享受として、ならびに人間的な生命の発現の総体として現存するのである(ibid, p.135)。

<sup>6)</sup> ジェラルド・M・エーデルマン, 2004, 『脳は空より広いか—「私」という現象を考える』 冬樹純子訳, 草思社, 2006年。

「個人は社会的存在である」ということを、マルクスはこのように云っています。そこで、感覚についてですが、これについては、Lさん、マルクスの中から拾い出すとするとどんなことがありますか。

L子：たくさんあって、難しいですけど、例えば、次のようなことを云っています。

人間は彼の全面的な本質を、全面的な仕方です、したがって一個の全体的人間〔ein totaler Mensch〕として自分のものとする。世界に対する人間的諸関係のどれもみな、すなわち、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、感ずる、思惟する、直感する、感じとる、意欲する、活動する、愛すること、要するに人間の個性のすべての諸器官は、その形態の上で直接的に共同的諸器官として存在する諸器官と同様に、それらの対象的な態度において、あるいは対象に対するそれらの態度において、対象〔をわがものとする〕獲得なのである。人間的現実性の獲得、対象に対するそれらの諸器官の態度は、人間的現実性の確証行為である。すなわち、人間的な能動性〔Wirksamkeit〕と人間的な受動的苦悩〔Leiden〕とである。なぜなら、受動的苦悩は、人間的に解すれば、人間の一つの自己享受だからである (ibid, p.136)。

同様に、他の人間の感覚や精神も、私自身が〔わがものとする〕獲得となっている。それゆえ、それらの直接的諸器官のほかに、社会という形態の中で、社会的な諸器官が形成される。したがってたとえば、他人と直接に共同してなされる活動などは、私の生命の発現の一つの器官となっており、人間的生命を獲得する一つの仕方となっている (ibid, p.138)。

マルクスの特徴は、人間の生命の発現を「所有(人間の共同的な自然との関係行為)」、あるいは「労働(人間の生命活動の疎外されたもの)」と捉えるところに特徴があります。

労働は、まず第一に人間と自然との間の一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するの

である。人間は自然素材に対して彼自身ひとつの自然力として相対する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体に備わる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然〔天性〕を変化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている潜勢力を発現させ、その諸力の営みを彼自身の統御に従わせる(『資本論』、大月文庫①, p.312)。

B子：要するにどうゆうこと？

X先生：マルクスは、「人間の五感の形成は全歴史の産物だ」というのですが、それは人間の対象的な活動(労働)に根拠を置いている。つまり、人間の欲求の対象は外的なものであり、それによって規定されざるを得ない、そういう意味で人間は受動的な存在であり、対象的な活動が人間が生きるということだと考えます。しかもこの活動は他の人との協働を通して行われる。そのことによって、共同的諸器官を形成しそれとの関係において個体の諸器官が形成されるし、この過程で外的自然と他者との関係および自分自身の自然(本性)を変化させる。この変化を推進するのが欲求(欠乏)の変化であるとマルクスは云います。人間が生きていく活動、生活を通して自己の自然を変化させていく。欲求や感覚の変化が対象的活動の変化を生み、かつそれによって変化させられていく、と捉えます。

近代社会になって、コモンセンスは、共通感覚というよりも常識と訳した方がよいような意味に変化します。それはたぶん、共通感覚とは別個の関係が自立的(自律的)に、貨幣関係によって形成されることによるのかもしれませんが。個人と他の個人、個人と社会が切れたうえで貨幣関係によって結合される。たとえば、身分制度 — 個人が身分と切り離されることのなかった時代の関係のもとであれ、個人と他の個人とが直接結び付いていた時代においては、共通感覚と常識とは分化することはなかった。統合失調症が近代の病だといわれるのは、こんなところにも根拠があるかもしれないね。



J子：最後の話はよくわからんけど、欲求や感覚の変化の話は、さっき先生が口走っていたユングの「原型」とか、ラカンの「対象A」とかとか何か関係ありそうな気がしますけど。

X先生：そうか、Jさんは、ユングやラカンも読んでたね。『経・哲草稿』で、レポートも書いてた。

E男：私は、ユングやラカンは、ちょっとかじっただけであきらめたからよく分からないけど、どんな関係があるの？

J子：ユングは「原型」を、集合的無意識、神、魂などの形式だといいます。それは、マルクスの「類的存在（本質）」とちょっと似たところもあります。ラカンは、フロイトをマルクスを使って読みなおそうとするのですが、「対象A」の議論は、マルクスの「物象化」あるいは「物心性」論と類似しています。無理して一般化すると、「楽園から現世、そして神の国へ」というキリスト教的思考の中で生まれたと言えるのかもしれない。

B子：もう少し丁寧に説明してよ。

X先生：ユングは、「人格の病」を、生の本来のあり方を回復しようとする全人格的な戦いが、病理的症状となって表れている事態だと言うんですね。彼によれば、「神」は、心の本来のあり方である全体性へのやむことなき希求が、夢や空想や幻想の体験において心に結んだ像<sup>イメージ</sup>であり、純粋に無意識の産物なのです。彼はまた、「自己」を「内なる神」とも呼び、現実の中で生きる人間が唯一依存する存在であることを強調します。ユングは、心の内奥から突き上げてくるものが「自己」

実現への希求であるともいいます。

マルクスは、人間は類的存在だというのが、その内容を自然的、共同的、意識的存在であるといいます。こうした存在（本質）の疎外の展開として私的所有（私有財産）をとらえようとします。しかし、それでは現実の展開を把握（論述）できないことに気づき、類的存在の規定を現実（歴史）の展開の背後にある枠組みとして使うことにします。そうして、欲求の変化を媒介（動因）として現実を把握しようとする。つまり、何を目指すべきか、何が真に人間的（神）であるかは、最初からわかっているわけではなく、嫌なこと「非人間的なもの」を廃棄して行くことを通じて、真に人間的なものが明らかになっていく過程として歴史をとらえるわけです。

ラカンの「対象A」というのは、マルクスのいう貨幣（物心崇拝 — 貨幣が現世の神になっている）のようなものです。貨幣を媒介にした関係が支配的になった近代社会においては、貨幣が神の座を占めます。つまり、我々が何らかの欲求をかなえたいと思ったとき、お金さえあれば大概のことはかないます。さまざまなものが手に入れられるだけでなく、他の人間を支配することもできます。お金があれば自分を魅力的な存在に見せることもでき、結婚相手さえ得ることができます。あるいは政治的な支配力を得ることもできます。だけど、それはゆがんだ欲望の関係です。自然と人間、人間相互の関係の真の調和ではありません。いわば、ゆがんだ欲望を真の欲望だと思って求めるということです。

しかし問題は、「歪んだ」と判断する基準である「真の」ものがあらかじめ在るわけではないということです。それは、何か違うとか嫌だとかいう違和感として感じ取られるものです。その違和感を感じ取るものこそ共通感覚と言ってもいいし、ユングのいう「原型」なのかもしれません。身体や脳の「原型」かもしれませんし、細胞のリズムのようなものかもしれません。したがってそれ自身も歴史的に変化していくものでもあります。その意味では過去が現在や未来を支配しているともいえます。

J子：市民討議会を推進しているV先生が、合意

形成は説得によってではなく共感によって形成されるとか言っていたけど、そういうことかな。

B子：えっ、どういうこと。

J子：合意形成は、理屈や説得によってなされるのではなく、人が賛意を表す時、現状を超える何か、具体的な形や言葉に表せない未来の予感に共感して行われるというようなことだと思います。

X先生：それは、「美しいもの」、「崇高なもの」かもしれないし、中村雄二郎がいう「共振」かもしれないね。

D子：「狂信」かもしれない（笑）。

X先生：そういう危険性は絶えずあるだろうね。現実との関係の中で妥協したりゆがめられたりしてしか具体的な形はとれないからね。

#### 4 一応の終結

B子：なるほど、少し話が見えてきた。ちょっと違うけど、卒論で地域通貨を取り上げて、ボランティア活動のネットワークを作るものとしてエコマネーは面白いと書いたんだけど、ボランティアも今では、無給の労働力の確保として利用されていることの方が多いからね。

X先生：他の地域通貨も同じように、国や自治体、商店の利益のために利用されているにすぎないとも言える。でも、そういうものと妥協したり、包摂されながら進める以外にない。昔、「革命」と呼ばれたり、労働者による権力奪取という言葉で語られていたものも、それが実現したとしても、それ自体は何か具体的な問題を解決するものではなく、解決の条件を作るにすぎない。人々の生活のありようが変わらない限り、あるいは、人間と自然、人間と他の人間との関係が変わらない限り問題は何も解決しない。

B子：先生そろそろまとめんと、時間がないよ。

X先生：えっ、もうそんな時間？ 要するに（笑）。大きく見れば、地域通貨の運動というのは、貨幣を媒介にした関係を廃棄し、人と人との直接的関係を打ち立てようということだと思う。さしあたりは、その一段階として、利潤と利子を廃棄して、等価交換の世界を作ろうとする試みだ

といえる。しかも、それをローカルなものとして、つまり顔の見える範囲で行おうとするもの。顔の見える範囲で、人の喜ぶ顔を見ることが自分の喜びでもあり、人に感謝したり感謝されたりする関係を作っていこうとすること。その中でそれぞれが生きている意味をつかもうとする運動だと思う。

レーニンが、労働組合は社会主義の学校だといったけど、地域通貨や市民討議会の運動は新しい社会の学校だと云ってもいい。それは世界的な規模で支配的になることはない。そこで人々が感じた、感動や共感が人々の生活のありようを変え、薄められながらであっても広がっていくと思う。

E男：先生、長生きしないといけないみたいです（笑）。

X先生：いや、私は長く生きなくてもいいんです。所詮この世はつかの間の夢ですよ。生きてる間楽しめればいいんです。『JAF MATE』の12月号に載っていたんだけど、高杉晋作の句にあるように「おもしろき こともない世を おもしろく」ですよ。